

## 生理心理学分野を開拓した元学生の急逝は、残念…

昨夕、国立 K 大学の現職教授の K 君の急逝の報に接し、驚きといいようのない寂しさを感じた。

彼のことを当 HP で触れたこと（HP「雑学 BN」の随想等関係（I）、2002.12.30.「元学生には、煩い存在かな？」、書籍等読後感関係（I）、2003.11.4.「『指先で紡ぐ愛』読んで思い出すのは……」：参照）がある。

私が大学に入学した頃は、障害児教育の講座は視覚障害、聴覚障害だけであったが、確か彼は T 大学に知的障害の講座開設の第一期生ただけに、自分の研究分野は自ら拓くしかなかったと思う。

彼が拓いた研究分野（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（I）、2003.5.18.「重症児研究と生理指標」：参照）を目指す後輩も次々と長年に渡り引き続いて出入りしてくれ、その元学生たちも彼の後に続くように次々と各国立大学の教官に巣立って行ったことから、彼はこの分野のパイオニアと云える。

彼は、博士論文や著書が出版される度にわざわざ私に謹呈してくれた。

昨年秋頃からはメールの返信はなかったので「仕事が忙しいのかな？」と案じてはいたが、昨年末に国立 U 大学の教壇に立つ元学生の O 君から、学会打ち合わせで U 大学に来て会った時に、「阿部さんによろしく、との伝言があった」と O 君から聞き安堵していただけに、急逝の報には唾然…、4 月半ばからは入院していたとは…。

彼は、研修室の大学院生には国際的学会で発表することを必修としたようで、「学生たちの学会発表に付き添って、毎年、外国旅行ができて楽しい」と話してくれたことも思い出す。

外国での学会発表を院生に課すなんて、国際的にも通じる専門分野の研究・波及に彼自身が努めている証でもあろうと、感服しながら聞いたことを思い出す。

重症児は反応がない、反応を読み取れないと見られがちな重症児問題の初期に、生理指標を持ち込んで生理心理学という新たな学問分野を開拓した彼の業績は、周産期医療の進歩の裏で超重症児が増えているだけに、今後益々重要視されると思う。

まだまだ若い人を育てる現職にある彼が、こんなに早く逝くとは…、残念、残念…。

追伸：

実は彼の奥さんも出入りしていた元学生の一人で、二人の結婚式にも呼ばれ、また、厚かましく新婚家庭を訪ねて食事をご馳走になったことも思い出し、悲しみは如何ばかりかの奥さんに、遠方だけに直接声をかけて上げられず申し訳ない限り…。